法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-08-19

【書評】小井沼広嗣『ヘーゲルの実践哲学の構想 ： 精神の生成と自律の実現』（法政大学出版局、二〇二〇年） ： ヘーゲル実践哲学の現代的地平を問う

KATAYAMA, Yoshihiro / 片山, 善博

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政哲学 / HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY
(巻 / Volume)
19
(開始ページ / Start Page)
75
(終了ページ / End Page)
78
(発行年 / Year)
2023-12-29

【書評】
小井沼広嗣『ヘーゲルの実践哲学の構想　精神の生成と自律の実現』（法政大学出版局、二〇二〇年）

ヘーゲル実践哲学の現代的地平を問う

片山善博

本書は、難解極まるイェーナ後期の『イェーナ体系構想Ⅲ』（以下『体系構想Ⅲ』）や『精神現象学』（以下『現象学』）を、カントやフィヒテの論稿と合わせて、ヘーゲルの実践哲学構想という視点から、丹念に読み解き、また適切なコメントをつけ、しかもわかりやすく噛み砕いた表現で叙述したものである。

『現象学』の研究、とりわけそれを中心としたイェーナ期後期の研究は、ヘーゲル研究の中でも多くの研究者の関心を駆り立て、魅了してきた。近年は、ドイツでのヘーゲル全集の刊行ほぼ完了されたことにより、ベルリン期の講義録を中心とした研究や、イェーナ期以前の研究も盛んになされるようになった。とはいえ、『精神現象学』とそこに至る形成過程の研究は、やはりヘーゲル研究の中心に位置しているものと言ってもよいだろう。著者は、まさにそこに焦点を合わせて、ヘーゲルの思想（実践哲学）の歩みを明らかにしようとしたと言える。

この時代についての研究蓄積は膨大であり、さまざまに多様な解釈が提示されてきた。またそれらの解釈は、その時代の研究者の関心にも大きく左右された。例えば、『体系構想Ⅲ』や『現象学』を、承認論を軸に読み取るという試みは、一九八〇年代以降のグローバル化や新自由主義の広がりと無関係ではないと思う。近年は、ピピンらがドイツ観念論の読み直しを行い、カント、フィヒテ、ヘーゲルを超越論的主観性の継承者として位置付けたが、著者もこの視点を維持していると言えるだろう。またプラグマティズムや分析哲学と関連付けた新たな解釈も示されている。

さて、著者は、本書の企図を端的に次のように述べている。「共同主観性という視座を含みもつヘーゲルの精神概念は、けっして超越論哲学のモチーフそのものを棄却しようとするものではなく、むしろカントやフィヒテにおけるそれがもつ制約を乗り越えようとするところにその積極的意義が認められるものである…ヘーゲルの精神概念は、…個人の自律と共同性とを同時に確立しようとする野心的な狙いをもつものとして解決可能だということを示したい。」（七頁）この意図に沿って、本書は三部で構成される。第一部が、『体系構想Ⅲ』における意志論と人倫構想であり、そこでは、フィヒテの承認論だけでなく、ルソーの国家論との対決から導き出されたヘーゲルの独自の意志論と人倫構想を提示している。第二部は、『現象学』における、「自己意識」章から「精神」章までの精神の生成のプロセスをカントの統覚論とフィヒテの自我論を検討しつつ明らかにする。同時に「共同主観性」の萌芽やテーマを見出し、両者の批判的継承として「共同主観性」に基づくヘーゲルの自己意識論を展開する。第三部は、「精神」章「道徳性」でカントの「最高善」との対決を軸として「幸福」の問題を扱い、カントにおける〈悪の克服〉の問題の解決としての徳福一致の可能性を示し、最後に「精神」章の「良心」における相互承認論を提示している。

本書のキーワードとして、まず「自律」と「共同主観性」があげられるだろう。著者は自律について、単なる形式的なものではなく、具体的な他者関係や歴史性の中で具体化されるものであると捉えている。したがって、自律は、他者との経験における自己形成（陶冶）によってもたらされる。つまり、自律は、複数の他者との間の共同主観性の中で陶冶を通して実質化されていくのである。この共同主観性において、ルソー的な「自由と共同」の思想やカント的倫理共同体の理念が実質化されていく。このような著者の読みは、本書の叙述の中で、説得的に示されている。

さて、評者が気になるいくつかの重要な論点を四つ指摘しておきたい。一つ目は、ヘーゲルの実践哲学へのルソーからの影響をどの程度のものと考えるかである。ルソーからの意志論（一般意志と個別意志の両立の問題）の影響についてはこれまでも指摘がなされてきたが、著者は特に『体系構想Ⅲ』にそれを見ている。つまりフィヒテ受容をする上で、ルソー的捉え直しがあったとする。二つ目は『現象学』の「自己意識」章の「承認」概念の捉え方である。著者は、「純粋承認概念」の最後の段階について、「第三の段階として、「二重の意味での自分自身への還帰」が成立する。自己意識は「ふたたび自分自身と同等になる」のだが、このことは同時に「他者をふたたび解放し自由にする」こ

とでもある。とはいえ、こうした二重の自己還帰は、決して自他が互いへの関係を断ち切る仕方で自己同等性を回復することではなく、むしろ他なる存在との媒介を通じた自己同等性を獲得することを意味する」（一六二頁）と述べる。これについては、二〇二三年六月に開催された「日本ヘーゲル学会」の合評会で評者の竹島あゆみ氏が、「他者をふたたび解放し自由にする」は、ヘーゲルではなくフィヒテの立場ではないかと質問していた。その当否はともかくとして、この箇所を含む承認の概念の記述をどう読むのかは、『現象学』の承認論を考察する上で肝要である。三つ目は「精神」章「良心」において相互承認が成り立つのか否かという点である。「良心」における相互承認の成立については著者の見解に賛同するものの、ここで成立した「良心」については、〈実体の主体化〉がテーマとなる「宗教」章や「絶対知」章との関係も視野に入れて考察する必要があるだろう（この点について著者は考察の対象としていない）。またこの「良心」は、「絶対知」章で登場する「美しき行動する良心」とどのような関係であるかも重要である。四つ目は、現代思想でも問題となる、「他者性」や「差異性」をどう捉えるかである。上記の合評会でも、承認が最終的に達成する自己同等性の回復において、他者の異質性が十分に考慮されていないのではないかといった質問が出ていた。同一性の哲学か差異の哲学かという単純な問題ではないのは確かである（この点は著者も十分踏まえている）が、ヘーゲルには常にまとわりつく問題でもある。他にも、「経験的な幸福主義とカントの厳格主義的な二分法を共に乗り越えようとするヘーゲルの企図」（二六九頁）が成功しているのか否か、など多くの論点がある。

ところで、評者が思うに、一八〇〇年前後のドイツは、哲学のみならず、文学や芸術においても、質量共にもっとも豊かな時代である。フランス革命の結果、古い体制に激震が走るとともに、一八世紀後半から始まっていた哲学、文学、芸術の新しい動きがさらに活発化した時代でもある。『現象学』には、ルソー、カント、フィヒテの影響のみならず、シラーやゲーテなど同時代人の影響も散見される。ゲーテの生命観、シラーの人間観は、例えば「理性」章の観察する理性や行為する理性などの成り立ちに深く関わっている。フィヒテの実践哲学を継承するシラーは、ルソーに対しても大きな関心を示している。「人間の美的教育について　一連の書簡」の初版の冒頭で、「人間を作るものが理性であるとすると、人間を導くものが感情である」とも述べて、シラー独自の衝動論を展開する。当時の文化的視点からヘーゲルの実践哲学を構想することもできるだろう。

最後に、著者の文体は、リズミカルな応答形式で、難解なヘーゲルの文章も小気味よく解釈できる。重厚な専門書であるが、同時に入門書としてもたいへん手に取りやすい著作であると考える。ぜひ、本書を通して、難解なヘーゲルの世界を味わっていただきたい。